

幼稚園教育要領における「人間関係」についての一考察

飛 田 隆

1. はじめに

幼稚園教育要領が2017（平成29）年に文部科学省から告示された。本論では（以下、新幼稚園教育要領）改訂された新幼稚園教育要領の改訂のポイントや中央教育審議会の諮問等も参考にしながら今回改訂された新幼稚園教育要領の中の「人間関係」について前の幼稚園教育要領（平成21年3月改訂、平成21年度から実施）と対比しながら考察していきたい。（以下、旧幼稚園教育要領）

今回の新幼稚園教育要領の改訂の経緯について、文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成30年3月）「第1節 改訂の基本的な考え方 1 改訂の経緯及び基本方針（1）改訂の経緯」^①によれば以下のように解説している。

「変化が急速で予測が困難な時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。このことは、本来、我が国の学校教育が大切にしてきたことであるものの、子供たちを取り巻く環境の変化により学校が抱える課題も複雑化・困難化する中で、これまでどおり学校の工夫だけにその実現を委ねることは困難になってきている。」^②

このように今回の新幼稚園教育要領の改訂は幼稚園教育のみを考えてのことではなく学校教育全般を見直す中での動きであることを理解しておく必要がある。

平成26年11月に文部科学大臣から中央教育審議会に諮問を行った。それを受けて平成28年12月に以下のような答申が示された。

中央教育審議会答申においては“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の6点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどが求められた。

①「何ができるようになるのか」（育成を目指す資質・能力）

②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）

- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施, 学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するのか」(子どもの発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身についたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

これを踏まえ、平成29年3月31日に学校教育法施行規則を改正するとともに、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領を公示した。幼稚園教育要領は、平成30年4月1日から実施することとしている。⁽³⁾

各学校において学校教育の改善・充実についての取り組みを中心に捉えていることが理解できる。

予測が困難な現状として複雑な社会変化の中で必ずしも計画通りにいかないことや新しい問題等に対しても目標を再構築することができるようにすることが求められているという認識のもと、より良い学校教育を目指し学校と社会が共有し新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育むことをねらいとしている。

学校教育の基礎である幼稚園にたいしては新幼稚園教育要領の改訂について中央教育審議会の答申を踏まえ、以下の基本方針が示されている。

①幼稚園教育において育みたい資質・能力の明確化

幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つを示し、幼稚園教育要領の第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むことを示した。

②小学校教育との円滑な接続

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(「健康な心と体」「自立心」「共同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」)を明確にし、これを小学校の教師と共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るよう努めるものとすることを示した。

③現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し

現代的な課題を踏まえた教育内容の見直しを図るとともに、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動や子育ての支援の充実を図った。⁽⁴⁾

この他に今回、同時に3法が改訂されている趣旨についても簡単に触れておきたい。

今回、「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂された。

その趣旨としては大きく以下の3点が考えられる。

- ① 3歳以上の子どもについての「幼児教育の共通化」
- ② 子ども・子育て支援新制度での「幼児教育の『質』の方向性」
- ③ 小学校から見たときの「幼児教育で育つ力の明確化」⁽⁵⁾

子ども・子育て支援新制度は平成27年4月にスタートし幼児期の「量」の確保と「質」の向上を推進する制度になっている。

具体的には「量」は待機児童問題の解消を考えており、「質」の方は研修の充実や教員・保育士等の処遇改善等を考えている。

以上のように新幼稚園教育要領については全体的な教育の新しい取り組みの中で改訂されたということや三法改訂の意味を考えたらうで「人間関係」について考察していきたい。

2. 旧幼稚園教育要領と新幼稚園教育要領の「人間関係」教師の関わり方

新幼稚園教育要領の中の「人間関係」についての旧幼稚園教育要領との違いは以下の傍線のところになる。

「1. ねらい (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 2. 内容 (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。 3. 内容の取扱い (1) 教師と信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。

(2) 一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること。(3) 幼児が互に関わりを深め (後略)」⁽⁶⁾

各項目の「関わり」については旧幼稚園教育要領ではひらがなの「かかわり」であったのが漢字に変更された。

その他の変更点はいずれも友達と一緒に活動することや自己の成長を期待していると思える。新幼稚園教育要領「第1章 総則 第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』(3) 共同性 友達と関わる中で、お互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」⁽⁷⁾を意図していると考ええる。

文部科学省「幼稚園教育要領解説」(平成30年3月)「人間関係」の解説では「(前略)ときには幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通してお互いに理解し合う体験や、考えを出し合ってよりよいものになるよう工夫したり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどを持つようになる。(後略)」⁽⁸⁾

上記3の内容の取扱いでの基本になるのは教師との信頼関係であることを踏まえて教師は常に子供との信頼関係の構築に努めなければならないと考える。

子供がいろいろな事に挑戦し諦めずにやり遂げるためには普段からの教師のかかわりが

重要であり、特に子供が失敗した時の対応が大切になると考える。失敗したところを指摘するのではなく、子どもが頑張ったこと、いつもよりも努力した点を認め励ますことが大切だと考える。

子供同士のトラブルについても常に教師が間に入って仲裁するのではなく、見守り、時間を与える中で子供同士が自ら仲直りの仕方を学んだり、時にはその他の子供が仲裁に入ったりする中でトラブルが解決されることもあると思う。

教師は一人一人の子供の個性や発達の違いを理解し子供にあった援助を心がけることが大切になると考える。また教師は子供のモデルの対象であることも意識し普段の人との関係についても考えておく必要がある。子ども達は無意識のうちに教師の関わり態度から人との付き合い方等を学ぶこともあるので、教員の人との関わり方は重要になっていることを意識しておく必要がある。

文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成30年3月）「人間関係」の内容の取扱いの解説でも以下のような記述がある。参考にした説明のみ抜粋する。

「試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感や満足感を味わうことができるようにするには、その心の動きに対して柔軟な応じ方をすることが重要である。教師が答えを示すのではなく、幼児の心の動きに沿って共に心を動かし、知恵を出し合ったりする関わり方が求められる。心の動きに沿った教師の応答は、幼児と生活を共にしながら心の動きを感じ取ろうとする過程の中で生まれてくる。教師の応じ方は全て幼児の内面を理解することと表裏一体となり、切り離せない物なのである。」⁽⁹⁾

新幼稚園教育要領になっても「人間関係」は子供同士の関係ばかりでなく教師と子供との人間関係が意図的、無意図的に影響を与えていることを理解しておくことが重要だと考える。

3. 配慮を必要とする子どもの人間関係

幼稚園には様々な個性のある子どもたちが通園している。教師は一人一人の子どもの個性に応じて関わり、教育しているが、近年幼稚園の中には定義が確立しているわけではないが、日常用語として「気になる子」、「困り感のある子」、「配慮が必要な子」等と教師から呼ばれる子どもたちがいる。

明らかな障害があるわけではなく、専門医等からも障害の診断がでていない子ども達の中にこだわりなどの行動や対人関係において独特な関わり方をする子ども達で、教育、援助の仕方等で教師が悩むことがある子ども達がいる。

ここでは気になる子についてわかりやすく整理されている文献を紹介する。『『気になる子ども』は日常用語で、しっかりとした定義はありませんが、①認知や行動・運動・感情などの発達に関すること②集団生活を送る上で周囲に迷惑をかける（たとえば、衝動的な行動をとる）など同年齢より注意力や抑制力が少ないことに関すること③緊張が強くて友達と遊べないなど対人関係・社会性に関すること④親の子どもへのかかわり方や養育への関心の薄さなど家庭環境に関することなどで、保育者が気になっていて、かならずしもはっきりした発達障がいを示していないが家庭環境上の問題がある子どもや軽度発達障がいの特性を示している子どもなど」⁽¹⁰⁾

上記の①については行動が極端にゆっくりだったり、毎回遅れたり、逆に多動で落ち着きがない子などがある。運動などは特定の動きが苦手で体が硬く同年齢の子どもと比べて体の使い方が不器用な場合もある。感情では多少の事でも激しく反応したり、少しの事で泣いたり、怒ったりして友達が困惑するなどの場合が考えられる。

②については集団の中で話を聞くことが苦手だったり、一番にこだわり教師の初めの言葉のみを聞いて行動してしまうことや一番になりたいために友達を押してしまう等、まわりの迷惑を考えないで行動してしまう場合もある。

③についてはその子どもなりのこだわりがあり、他の子からその子の遊び方がわかりにくかったり、他の子を自分の遊びに入れず、一人遊びを好みなかなか友達と遊べなかったりする。集団でおこなう遊びに参加せず見ていたり、参加しなかったりして集団でおこなう行事等での行動に気持ちが向かず配慮が必要になる子どももいる。

④の場合は親の養育態度に問題があったり、ひとり親の場合などで兄弟が多い場合などはなかなか一人一人にスキンシップ等が不足気味であったり、子どもにとっては愛情の不足を感じている場合もある。その他、貧困の問題なども考えられ、そのことが子どもの経験不足につながっている場合もある。

以上のような事が複数含まれる場合もあり教師としてはなかなか難し対応を求められることも多い。

この他にも障害の診断がついている子ども達もいる場合もあり、教師としては教育、支援・援助について難しさを感じているのではないと思う。

このような子どもたちについて新幼稚園教育要領には特別な配慮の必要とされる子どもについて以下の通り記述されている。

「第5 特別な配慮を必要とする幼児への指導 1 障害のある幼児などへの指導 障害のある幼児などへの指導に当たっては、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことに配慮し、特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行なうものとする。また、家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関との連携を図り、長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために、個別的教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに、個々の幼児の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。」⁽¹¹⁾

担任のみで抱え込むのではなく教員集団として対応することも考えておくことが必要である。また幼稚園の組織のみで考えるとなかなか対応の難しいと思われる子供であっても、特別支援学校などの助言又は援助を活用することで新たな関わり方や援助の仕方がわかることも考えられる。

今回改訂になった新幼稚園教育要領では家庭、地域及び医療や福祉、保健等との連携という視点も加わりより関係機関との連携を意識するようになったことも忘れてはならない。教員は幼稚園のみで考えるのではなく地域にある関係機関との連携を考え子どもへの支援・援助を考える必要がある。

そのことに伴い個別的教育支援計画を作成し活用することも大切で配慮の必要な子供の個別の支援計画を意識することでより具体的でその子供にあった教育が計画的にできるこ

ともつながっていく。

このことは配慮の必要な子供との人間関係を深めるだけでなく、そのような子供に対しての教員の関わり方からクラスの子ども達も意図的、無意図的に関係の取り方を学ぶことにつながると考えられる。

この他、教師は、子供と人やものとのかわりが重要であることも考え、物的・空間的環境をわかりやすく構成しなければならない。また教材を工夫し子供の興味・関心をもたせることも考えておくことが大切である。

4. 保護者との人間関係

幼稚園教育は家庭との連携が不可欠でいかに保護者とのより良い人間関係を築くかが大切になると考える。保護者の中には歩いて子供と登園する場合もあるし園バス等を使って登園している子供もいると思う。毎日歩いて登園してくれる保護者の場合には教師と顔を合わせられるので短い時間でも子どもの様子や家庭の様子等の情報交換が可能であるが、バスを利用しての子供の場合は登園、降園時の情報交換は難しくなる。

そのような保護者を意識することは大切で、幼稚園に來ないからそのまま良いということではなく、教師からの働きかけは大切だと考える。

例えば保護者とのより良い関係を築く事を意識した連絡帳とクラスだよりや所長・園長だよりを工夫することでより良い人間関係が築けると考える。例えば時には園バスの中での様子をまとめた特集を所長・園長だよりにして発行するとか、クラスだよりでは普段幼稚園に送り迎えをされていない保護者を意識して文章のみだけでなく写真を多く入れ子供たちが楽しく元気に遊んでいる姿を紹介する。こうすることで園バス通園の子供の保護者に今園で流行っている遊びの情報提供にもつながる。子供の写真を載せるときにはクラスの子供全員が写っていることが大切だが、今回は「バス通園の子供たちの特集」等のコメントを付ければ問題ないと考える。(個人情報の観点から保護者全員に写真を使うことについて事前に許可を取っておくことは大切)

連絡帳は本来、園での子ども様子を伝えることが主な活用の仕方だと思うが、教師から、保護者の相談や質問が出やすいように年齢に合わせて多くの保護者が悩んだり、不安に感じたり、迷うようなことを予想して項目を作っておき保護者はその項目にチェックするだけにしておき、教員や保育士はチェックしてある項目に答えるような連絡帳にしておく、という活用方法もできると考えている。連絡帳の活用にあたっては教員からの一方的な考え方の押し付けや、単なる知識の羅列にならないように意識して記入することが求められる。

このような連絡帳の活用の仕方は教員にとってもよい影響がでる。保護者になるべく具体的な子供の様子を伝えようとするためには事前に子どもの遊びの様子を丁寧に観察したり、発達の様子を意識したりすることにつながるからである。また各家庭状況の把握にもつながることも期待できる。

この他、例えば幼稚園が「園庭開放」や「絵本の貸し出し」等、積極的に保護者を幼稚園に呼び込むような工夫をしても良いと考えている。

新幼稚園教育要領、第3章の2に「幼稚園の運営に当たっては、子育て支援のために保

護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めるものとする。(後略)」⁽¹²⁾と記述されている。

以上の事を踏まえ保護者への積極的な情報提供も考えることで保護者との関係をより良いものにできると考えている。

5. おわりに

人間関係は幼稚園教育だけでなく人と人が関わるということで社会生活が成り立っていることを考えれば人間にとっての基本である。

子供にとっての人間関係の基本は家庭と幼稚園であることを考えれば幼稚園での役割の重要性がわかる。人間関係を支え深める手立てとして家庭支援、子育て支援や地域支援の必要性もあると考える。

本稿では教師がどう子どもと関わるかについて、また配慮を必要とする子供の人間関係、保護者との人間関係について論じたが、家庭や幼稚園を取り巻く地域社会、支援等については紙面の関係上取り上げられなかったので今後の課題としたい。

引用文献

1. 文部科学省, 幼稚園教育要領解説(平成30年3月) 株式会社フレーベル館 平成30年 2頁
2. 同上
3. 同上 2, 3頁
4. 同上 4頁
5. 無藤隆, 「3法令改訂(定)の要点とこれからの保育」 株式会社チャイルド本社, 2017年7月, 22頁
6. 無藤隆, 汐見稔幸, 砂上史子, 「ここがポイント! 3法令ガイドブック」 株式会社フレーベル館 2017年5月, 68, 69頁
7. 文部科学省, 幼稚園教育要領(平成29年告示) 株式会社フレーベル館 2017年4月, 5, 6頁
8. 文部科学省, 幼稚園教育要領解説(平成30年3月) 株式会社フレーベル館 平成30年, 167頁
9. 同上 183頁
10. 柴田正行(編著), 「障がい児保育の基礎」, わかば社, 2014年, 44頁
11. 文部科学省, 幼稚園教育要領(平成29年告示) 株式会社フレーベル館 2017年4月, 12頁
12. 文部科学省, 幼稚園教育要領(平成29年告示) 株式会社フレーベル館 2017年4月, 22頁

A Study of Human Relationships in “Course of Study for Kindergarten”

Takashi Tobita

“Course of Study for Kindergarten” was notified by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in 2017. “Human Relationships” carried in “Chapter2 Aims and Contents” is considered in this paper.

Aims of Chapter2 says, “To become familiar with and deepen relationships with others they are close to—.” Close person means parents and, if they have brothers or sisters, family for children.

In the kindergarten, close person must be teachers and friends, so this paper treats “Aims and Contents” through children’s human relations with them. Furthermore, Aim (3) refers to “Social Life.” This indicates broader human relations. Therefore by examining how kindergarten cooperates with broader area—local community, this paper considers how desirable human relations is cultivated in kindergarten education.